

雄勝町の文化財(一)

雄勝町の板碑

雄勝町教育委員会

雄勝町の文化財(一)

雄勝町の板碑

刊行にあたつて

雄勝町教育委員会 教育長 志 村 武 彦

雄勝町は、豊かな風土に恵まれ、数多くの自然的・文化的遺産が残されております。

先人が残したこれらの貴重な文化遺産や文化資料を記録保存し、後世に伝えることを目的に、ここに「雄勝町の文化財・板碑」発刊の運びとなりました。

雄勝町の歴史を辿る時、原始古代の資料は残されていますが、中世期の資料となると、ほとんどないといつてもよいほどです。そういった中で、今回発刊の板碑の中に、今まで未知のものであった中世の生活の一端を垣間見ることができます。これは、雄勝町の歴史を正しく理解するうえで大変貴重な資料の集成であります。

どうかより多くの方々が祖先の生活をしのび、郷土の変遷を理解され、先人とのつながりから生まれる、我が郷土への愛着を深められますと共に、明日の雄勝町を考える一助とされることを切望するものです。

発刊にあたり、ご指導、ご尽力いただきました石巻市文化財保護委員の佐藤雄一先生はじめ、関係各位のご協力とご支援に対し厚くお礼申し上げます。この集録が、今後一層町民の皆様の文化財に対するご理解を深め、歴史や文化財を愛護する精神の高揚に役立つものとなる事を祈念し、刊行にあたつてのご挨拶と致します。

平成六年三月

発刊によせて

雄勝町長 山 下 壽 郎

本町の文化財保護行政の一環として、ここにその事業の成果ともいえる「雄勝町の文化財・板碑」が発刊の運びになりましたことは、誠にご同慶にたえません。

私共の郷土が今日、観光、漁業の町として発展を遂げつつあるのも、先人がこの地に生活を求め、フロンティア精神を發揮し、幾多の苦難を乗り越え、悠久の歴史を築きあげた祖先の尊い血と汗の結晶の賜であります。

今回発刊された集録は、私どもの祖先の生活の推移を知る上で、貴重な資料の集成であります。この様な激動の時代にこそ、私どもは祖先が心血を注いで築いた古えの郷土の姿を忍び、文化遺産を本町の歴史の続く限り、後世に伝える責務があると考えます。この様な意味から今回の企画はまことに意義深く、時宜を得たものと存じます。

どうかより多くの方々が祖先の古き時代の生活を忍び、郷土の変遷を理解されるため、本書に親しまれるよう切望してやみません。

終わりに、発刊に際しご努力をいただいた、佐藤雄一先生並びに関係各位に心から感謝と敬意を表し発刊のことばと致します。

平成六年三月

編集にあたつて

雄勝町文化財保護委員会 委員長 杉山 源之助

「文化財」とは、地域の文化が長い年月の間に育んできた財産であり、郷土の宝であります。

最近、経済の安定化と週休二日制が定着しつつある中で、文化に関する情報がマスメディアで取り上げられる機会が多く、大変貴重なものが見受けられます。これらを守り、後の世に伝えていくという私達の役割は、日毎に重みを増してきましたと言えます。

「文化財」は我々の祖先がそれぞれの時代にわたり、創造し育成してきた貴重な歴史的遺産であると考えます。このような大切な文化遺産は、郷土の歴史を知る上で重要であるばかりでなく、将来の町づくりの上でも活用出来るものと考えられます。

この度紹介する町内の板碑は、その一部でありますが、町民に正しく理解され確実に伝わるよう念願し編集したものであります。

本委員会としましても、この板碑の出版を契機に、雄勝町の文化財の確実なる保存、保護そして活用の面でも、今後さらなる文化財保護事業の推進にあたりたいと存じます。今後とも町民各位のご協力をお願いいたします。

平成六年三月

目

次

刊行にあたつて	雄勝町教育委員会 教育長 志村 武彦	1
発刊によせて	雄勝町長 山下壽郎	2
編集にあたつて	雄勝町文化財保護委員会 委員長 杉山 源之助	3
凡例		5
雄勝町の板碑	佐藤 雄一	6
雄勝町板碑分布図		13
△船越地区		15
△熊沢地区		18
△羽坂地区		20
△立浜地区		26
△大浜地区		33
△下雄勝地区		42
△雄勝寺地区		45
△雄勝吳臺地区		51
△分浜地区		65
△波板地区		66
資料(地区別一覧・年代順一覧)		67
編集後記	雄勝町教育委員会 社会教育課長 千葉 博	80

凡例

一、雄勝町内に現存し、確認できた板碑六十一基を集録してある。

・船越　　・熊沢　　・羽坂　　・立浜　　・大浜
・下雄勝　　・雄勝字寺　・興壇　　・分浜　　・波板

一、各地区の板碑には、所在地毎の番号を付し、さらに雄勝町全体を年代順に配した資料番号を並記した。

一、雄勝町全体の位置図の番号は、板碑を年代順に配した際の番号で、本文の資料番号と同じである。

一、板碑の縮尺は十分の一を原則とし、二〇〇 $\frac{1}{4}$ を越えるもの、あるいは断碑などで五十 $\frac{1}{4}$ 以下の碑については、掲載のバランスから十分の一にこだわらなかつた。それらの縮尺についてはそれぞれの碑のところで記してある。碑の法量はおよそその数値である。
一、拓本はA3版に入るよう縮尺し、それを元にしてトレースを行つた。種子、天蓋、花瓶には墨入れを行い、文字については碑に合わせて活字で入れである。

一、文字の位置は碑のほぼ原位置に合わせてある。

一、材質については、各碑の説明文の項目で明記し、さらに末尾の板碑一覧表にも記してある。

一、解読の文字は碑の文字を忠実に使っているが、為などの草書体は楷書体にしてある。

一、文字があつて、解読できないもので數の判明するものは、□□□□□のように表わし、文字のあることは判明するが數の確定できない所は□□□□□のようにしてある。

一、末尾に雄勝町板碑の編年一覧表および各地区の一覧表を添えてある。さらに「雄勝町史」にあり、今回の調査で確認できなかつた板碑の表も付してある。

一、傷の出典は「石仏偶彌辞典」(加藤政久)を参照している。

雄勝町の板碑

佐藤雄一

中世期に雄勝町に住んだ人々の高度な宗教生活の一端を知ることが出来た。

1、雄勝町

桃生郡の東端に位置し、東部はリアス式海岸の雄勝半島、北部は名振湾、雄勝湾を擁しており、牡鹿半島東側の延長線上にある。近世期には桃生郡南方大肝入の支配下にあり、現町域の名振浜、船越浜、大須浜、熊沢浜、桑浜、立浜、大浜、小島浜、雄勝浜、明神浜、水浜、分浜の十村と現河北町の釜谷浜、長面浜、尾崎浜の十五村を総称して十五浜と呼ばれた。明治二十二年四月一日、現町域の十二村が合併して十五浜村となり、釜谷浜、長面浜、尾崎浜は福地村、針岡村と合併して大川村となっている。十五浜村は昭和十六年四月一日に町制を施行して、現在の雄勝町になった。山地が多いため近世では新田開発はほとんどおこなわれず、漁業によって生計を立てていた。現在は各浜の湾内ではワカメ、銀ザケ、ホタテガイ、カキの養殖が盛んであり、また特産品として玄昌石を材料とした硯、スレートがあり、特に硯は全国一の生産量をほこっている。

板碑造立の時期である中世期における雄勝町の姿はまったくわかつてない。鎌倉時代には牡鹿郡は葛西氏、桃生郡のうち深谷保は長江氏、残る桃生郡が山内首藤氏によって支配されていたことは文献によつて確認することができる。したがつて桃生郡の一部であった現雄勝町の地域は山内首藤氏の支配下にあつたようと思えるが、確たる文献が見当らず、現在では、おそらく葛西氏の支配下であつたろうと推定されているようである。このように雄勝町の中世期における支配関係は不明といつた状態に近いのであるが、今回の調査の結果、六十一基の板碑が確認され、

インドに発生し、中國、朝鮮半島を経由してわが国に渡来してきた仏教は急速に受け入れられてゆくが、それは次第に政治と融合し鎮護国家のためのよりどころとしてひまつっていく。

しかし、時代が下がるにつれ、現世で阿弥陀佛に念すれば、来世は極楽浄土に往生できるという浄土教の教えが広まるようになると、仏教は鎮護国家という性格をもながらも次第に個人の現世利益と後生安樂を願うものへと変わっていくのである。「望月の欠けたることもなし」と一代の榮華を誇った藤原道長さえもが、その死の近いことを知ると阿弥陀如来の来迎を願い、「立て回した屏風の西側を開けて、九体の阿弥陀佛に面し、西向き北枕に臥した、祝迦入滅の姿をとつた」という（榮華物語・三十）逸話はあまりにも有名である。

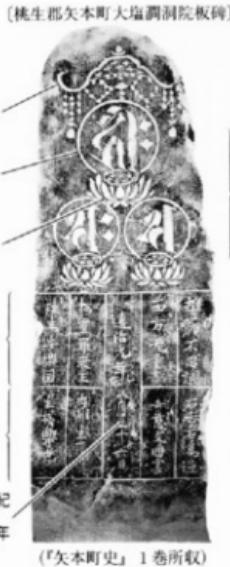
このような現世利益、後生安樂の願いは絶えることなく広まり続け、鎌倉時代になると先祖の供養とこの現当二世安樂を願うために当時の指導者階級を中心にして造立された。このようになりました。このように石造寺塔婆造立の風習は東国では武士團を中心に広まつたと推定され、ほど日本全国に普及していきます。もちろん東北地方にも広まり、宮城県は東北六県の中でも質量ともに他の追随を許さないほどである。

この鎌倉時代嘉禄年代（一二二五）から始まつたとされる石造寺塔婆が「板碑」といはらわされている石造物なのである。このように板碑は卒塔婆なのですから、その造立の趣旨は現在でも私たちが先祖供養のために造立している板卒塔婆と何ら変わることはありません。しかし中世期の石造寺塔婆（板碑）には、種子と呼ばれる一字で佛を表す梵字、絆文の一部を抜き出した「偈」と通称される短文、それに板碑造立の理由、造立年月日、また天蓋や花瓶・香炉・燭台の三具足等が刻され

ることもあり、信仰の表現や内容的には現代の板塚塔婆よりもはるかに充実した美しいものです。

阿弥陀三尊種子

種文



(『矢本町史』1巻所収)

図1 板碑の模式図

(1)十五浜村大浜大道
弘安〔月十一月五日 右為慈母□□

(2)同 村大須坂越 文保元年八月十二日死去 (渡辺兵部墓)

*現在不明

(3)同 村雄勝天雄寺山門 天文二十二年 山下豊後

金石篇には、(1)・(3)の2基が集録されている。仙台藩の板碑については、ごく少数ながら「風土記書上」に記録されてはいるのであるが、雄勝町の「風土記書上」は一冊も発見されていないので、これから板碑をさぐることはできません。

この度の調査によつて、雄勝町史作成の段階で確認されて、今回の調査で不明なものもありましたが、雄勝町には六十一基（断碑も含む）の板碑が確認されました。これからは、この「板碑」を手がかりにして、不明とされている雄勝町の中世史研究が一層進展されることが期待されます。

3、雄勝町の板碑調査

宮城県全体の板碑がまとまつた形で公刊されたのは、昭和六年に刊行された「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告」（調査報告と略記）の中で発表された清水東四郎氏の「宮城県の古碑」であり、ついで昭和三十一年の宮城県史・金石篇（金石篇と略記）においてである。調査報告には、雄勝町の板碑として

○ 光 参 本 公 信 士 雅 位
三十三年季為菩提也 右秋山掃部之助 敬白
于時 天和二壬戌季十月廿日

とあるように、この碑は明らかに三十三年忌供養のための碑であると思われ、いわゆる墓碑とは趣を異にし、卒塔婆としての板碑に近い表現

(表1) 雄勝町板碑の地域分布

駆 州	鎌 倉	南北朝	室 町	寛 永	不 明	計
船 越	1 (1)				2	3
大 須		(1)	(1)			(2)
熊 沢			2		2 (2)	4 (2)
羽 坂	2 (2)	1	1		2	6 (2)
立 浜		1 (3)	2		5 (1)	8 (4)
大 浜	4 (2)	(2)	1		4 (2)	9 (6)
下 雄 勝	1	2 (1)	(1)		1	4 (2)
寺		2	1 (1)	3 (3)	1 (1)	7 (5)
呉 壺	1	10 (6)	1 (1)		6 (3)	18 (6)
分 浜				1		1
波 板		(1)	1 (1)			1 (2)
計	9 (5)	16 (6)	9 (5)	4 (3)	23 (9)	61 (40)

* () の数字は「雄勝町史」の調査数である。

内容をもつてゐるからである。岩澤氏のこの認識は石巻市周辺の板碑から近世墓碑への移行の過程を示唆するものとして重要な認識である。今後の研究課題であろう。

4、雄勝町の板碑

(a) 分布地域

岩澤氏は雄勝町行政区十二のうち、明神浜、桑浜を除いた十浜において古碑が確認されたとしているが水浜の八基は江戸時代の碑であり、鎌倉時代の「永仁の碑」も銘文等から考察すると「永仁」までさかのばることはないと推定されるし、この碑は今回の調査で確認することはできなかつた。したがつて今回の調査集録には入つていません。このような状況をふまえて、雄勝町の板碑分布地域をまとめると表(1)のようになる。

内容をもつてゐるからである。岩澤氏のこの認識は石巻市周辺の板碑から近世墓碑への移行の過程を示唆するものとして重要な認識である。今後の研究課題であろう。

4、雄勝町の板碑

(a) 分布地域

岩澤氏は雄勝町行政区十二のうち、明神浜、桑浜を除いた十浜において古碑が確認されたとしているが水浜の八基は江戸時代の碑であり、鎌倉時代の「永仁の碑」も銘文等から考察すると「永仁」までさかのばることはないと推定されるし、この碑は今回の調査で確認することはできなかつた。したがつて今回の調査集録には入つていません。このような状況をふまえて、雄勝町の板碑分布地域をまとめると表(1)のようになる。

この表(1)によつて雄勝町板碑の地域分布をみてみると、呉壺に板碑が集中していることがわかる。しかし岩澤氏は呉壺では二十五基の板碑を確認しているが、今回は十八基しか確認できなかつた。この中で岩澤氏は南北朝期の紀年銘をもつものを十六基確認され、一地域としては群を抜いて多いのであるが、今回は十基しか確認できなかつたが、やはり他の地域と比べると多いほうである。呉壺板碑群の数の減少は道路の拡幅工事の際の移動によるものと思われる。呉壺板碑群を雄勝町板碑群の時代的な分布と重ね合わせてみると、呉壺の地域は南北朝期の中心地であったことを物語つているようである。

これに対しより古い年代の鎌倉期の板碑は呉壺の対岸にある大浜、中央の五輪塔の中にキヤ・カラ・バア(発心門)の五大種子が刻されており、他の五輪塔が刻されている年代不明の1基とあわせて室町時代以前の板碑と推定され、更に羽坂で2基、船越で1基など8基が確認された。さらに船越地区の年代不明の1基は天蓋、花瓶を配し、中央の五輪塔の中にキヤ・カラ・バア(発心門)の五大種子が刻されており、他の五輪塔が刻されている年代不明の1基とあわせて室町時代以前の板碑と推定され、更に羽坂の正応二年、正応三年の2基を組合して考察してみると、このことは雄勝町への中世文化の流入地はこの船越、大浜、羽坂であつたろうということを類推せることになるのである。

(b) 年代のひろがり

雄勝町の板碑総数61基のうち紀年銘の判明するもの38基、不明のもの23基である。それを20年毎の区切りでまとめたものが(表2)であり、その明細は年代順一覧に整理されているものである。

紀年銘の判明する板碑で最古のものは、大浜・千葉貞四郎氏宅前に園定されている弘安八年十一月五日碑(資料番号1)、同所の弘安八年十一月碑(資料番号2)である。この二つの碑は、種子はともにア(胎・大日)であり、紀年銘も同じであり、さらに判読可能な部分とともに「悲母」

(表2) 牡鹿半島板碑分布

(牡鹿町・女川町・雄勝町・旧萩浜村)

記号	時代	地 区	牡鹿町	女川町	雄勝町	旧萩浜村	小計
A	鎌倉	1271-1290	1	3	5	4	13
B		1291-1310	4	2	2	6	14
C		1311-1330	2	3	2	4	11
D	南北朝	1331-1350	1	1	7	3	12
E		1351-1370	4	2	4	3	13
F		1371-1390	0	1	5	4	10
G	室町I	1391-1410	12	2	4	5	23
H		1411-1430	4	2	1	7	14
I		1431-1450	2	0	0	2	4
J		1451-1470	1	1	2	2	6
K	室町II	1471-1490	2	1	0	0	3
L		1491-1510	1	1	1	0	3
M		1511-1530	2	0	0	1	3
N		1531-1550	2	0	0	0	2
O		1551-1570	1	0	1	1	3
P	安土	1571-1590	0	1	1	1	3
Q	桃山	1591-1610	0	0	2	0	2
R		1611-1630	0	1	1	0	2
小計			39	21	38	43	141
不明			30	13	23	28	94
合計			69	34	61	71	235

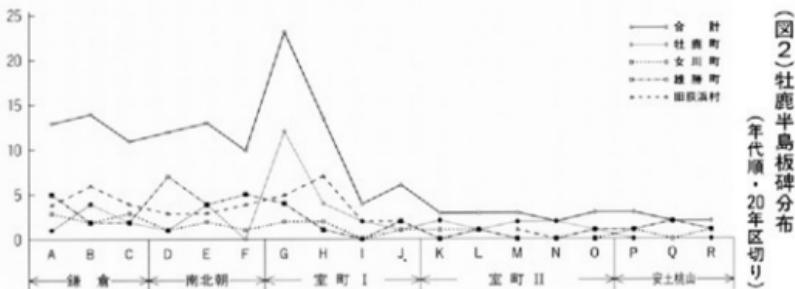
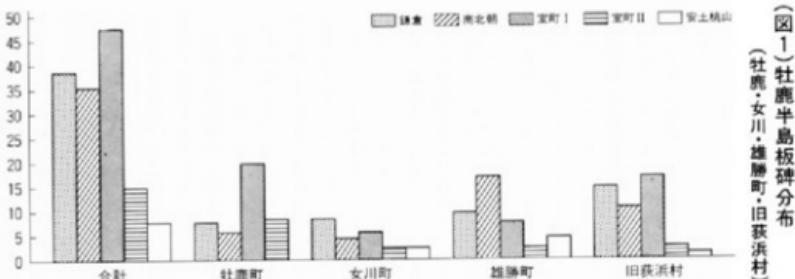
*室町時代I・IIの区分は応仁の乱を目安にしている

*最古女川町の建治二年(1276)、最新は女川町の慶長二十年(1615)である

であり、まったく同一の内容が刻されていると推定される。材質も玄石と同じである。前者は宮城県史・金石篇で「弘安元年十一月五日」として集録されている碑であると思われる。

最新の碑は天徳寺境内の慶長十七年四月廿八日碑(資料番号38)であり、銘文は鎌倉・室町・南北朝時代の定形化されているものとは趣の違つたものになっている。

表(2)を基準にしてグラフ化したものが図(1)・(2)であり、このグラフから、一般的には鎌倉時代の初期に出現し、南北朝時代から室町時代にかけてピークに達し、慶長年代に消滅したとされる板碑の盛衰の状況が、ある程度雄勝町でも観察されるようである。このことを雄勝町を含めた牡鹿半島という範囲で観察すると一層明確になるようであ



紀年銘のある板碑の中で、雄勝町では他に見られない現象が表われている。それは、資料番号11・12・13の3基についてである。12・13の碑はともに興國五年で南朝年号、11は康永三年で北朝年号であり、ともに西暦一三四四年の同年なのである。宮城県では興國三年（一三四二・康永元）の三迫の戦で南朝勢力が後退している。このような政治情勢を反映してか、当時県内で造立された板碑の紀年銘も南朝年号の興國は四年を下限として、それ以後は北朝年号に転換し、南北朝合一が実現するまで南朝年号は刻されることはないようである。しかし、雄勝町では興國五年碑（南朝・一三四四）と康永三年碑（北朝・一三四四）とが、吳臺、天雄寺門、下雄勝と指呼の間に存在するのである。これを単なる情報伝達の遅れと簡単に処理してしまっていいものであろうか。南北朝動乱期における地方の情勢を映しているものなのではないだろうか。今後の課題であろう。

(c) 板碑の材質

雄勝町板碑群の材質は、玄昌石と呼びならわされている古生代二疊紀の登米層に属する粘板岩54%、中生代三疊紀の船井層に属する粘板岩によるものが38%で、両者で90%以上を占めている。そして玄昌石が主として使用されている地域、たとえば船越、吳臺地区には登米層が、井内石と通称される船井層に属する粘板岩が主として使用されている地域、たとえば立浜地区には船井層群のうちの大沢層が走っているのである。したがって、雄勝町板碑群の石材は他の地区から運び込まれたものではなく、それぞれの地域に産する石材を使って造立されているものと推定することが妥当なようである。

(d) 種子について

わが国では、忌日供養を行うにあたって、忌日に合わせてそれぞれの中心になる本地佛（主尊）が定められており、この本地佛が石造草塔婆

としての板碑には梵字で表現されている。これが一般に種子と呼ばれているものである。種子の本性については石村喜英氏は江戸時代の悉曇学僧淨巣は「悉曇三密鉢」の中で「種子の字はすなわちこれ佛菩薩の身なり」と述べているとされる。すなわち、種子とは梵字一字でもってそのなかに佛の相（すがた）、本誓（ほんせい）、三昧（さんまい）などすべてがふくまれ、そこには佛のもつ無量の意趣が内にこめられていると、經典では説かれているのであると説明されています。（仏教考古学研究）雄勝町板碑群で、種子が確認できるものは紀年銘不明のものをふくめて40基である。その種子を十三佛供養と各時代ごとに一覽表にまとめたものが表（3）であり、その中から忌日、種子、年代が刻されているものの抜き出し十三佛供養の種子と一致するかどうかを比べてみたのが表（4）である。

表（3）で特徴的なことは、南北朝時代の地蔵種子（カ）の8基が他の種子とくらべて突出していることである。このような傾向は、石巻市内でも確認されてきたのであるが、従来は單に地蔵信仰の普及といった程度の解釈ですまされてきていたのである。しかし私は地蔵種子（カ）のあまりにも多い表われかたに何らの意味があり、單に地蔵信仰の普及といったことで片付けられないのではないかと疑問をもっていたのである。それならば、この地蔵種子（カ）の表われ方をどんなことと結びつけができるのであろうか。私はその接点は忌日供養、特に十三佛信仰の流れのなかで考察できるのではないかと推量した。すなわち、十三佛信仰の五七日忌の本地佛に地蔵菩薩があげられてることに関連性はないのだろうか、五七日忌の供養は宗教行事のうえで何か特別の行事として重要視されていたのではないかと推量したのである。しかし、初七日からはじまり七七日（四十九日）で終わる中陰の法事のなかでは、やはり最後の七七日の法事が一つの区切りとして重要視されているようである。とすると、五七日忌の多数表われる現象は、他に論拠を求めるならばならない。たとえば五七日忌の十王思想の垂迹王が閻魔王で

あるということ、あるいは圓像板碑に阿弥陀三尊の下に六地蔵が表わされているたりするということも解決の手がかりになるのかもしれない。

(表3) 種子一覧表(時代別)

種子	忌日	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代	安土桃山時代	不明	合計
カーン (不動)	初七日					2	2
カ (地藏)	五七日		8				8
イ (地藏)	五七日		1				1
ア (大日)		3					3
バイ (薬師)	七七日					1	1
サ (觀音)	百ヶ日			3		2	5
サク (勢至)	一周忌			2			2
キリーケ(阿弥陀)	三年忌	2	1	1		2	6
アーク (大日)	七年忌	1				1	2
バン (大日)	十三年忌	1	4			1	6
タラーク(虛空藏)	三十三年忌		1				1
三尊		1	1		1		3
合計		8	16	5	2	9	40

(表4) 年忌供養と種子

忌日	種子	年代	西暦	合否	備考
四十九日	ア(大日)	正応三年	1290	×	(バイ)
百ヶ日	バン(大日)	応安八年	1375	×	(サ)
百ヶ日	/	明徳五年	1394		
一周忌	バン(大日)	観応	1351	×	(サク)
三年忌	キリーケ(阿弥陀)	元亨三年	1323	○	
七年忌	/	/	/		
三十三年忌	タラーク(虛空藏)	貞和二年	1346		(タラーク)
逆修	阿弥陀三尊	延文□丙子年	1366		
逆修	阿弥陀三尊	天文廿二年	1553		

このことは右巻市近辺の特殊な状況であるかもしれないが、他の地域でも石巻市近辺と同じような地蔵種子の表れ方が確認されているならば、ご教示ねがいたいと思っている。今後の課題として提起しておきたいと思う。

雄勝町板碑群の種子を観察しているうちに、時代によって種子の書き方に変化があることに気がついた。すなわち、梵字の書き出しは最初に筆を下す時に出る点がア点であり、発心に当たるとして命点と呼ばれる。雄勝町板碑群の種子の書き出しは、鎌倉時代のものにはア点がはつきりと刻されているが、室町時代に入ると消えており、種子の書き方の時代的な変遷がわかるのである。

5、雄勝町の代表的な板碑

(a) 船越地区の板碑

地区番号1(資料番号8)は船越地区の玄昌石を石材として使用されたものと思われ、種子、蓮台、銘文とともに鎌倉時代の形式をよく伝えている。

地区番号2(資料番号39)は界線を施し、天蓋、五輪塔、花瓶が刻されており、五輪塔の中にはキヤカラバアの五大種子が刻されている。花瓶の刻されている板碑は、地区番号3とともにこの2基だけである。

(b) 羽賀地区的板碑

地区番号1・2(資料番号3・5)の2基は今野太郎氏によって氏神として祀られている。特に後者は全体を二つに区画する界線を施し、觀無量寿仏經疏第一を出典とする儒を刻し、七七日忌の供養のために造立されている。両者ともに種子と蓮台が美しい。

地区番号6(資料番号44)の板碑は彫り方が浅く、拓本によつて確認すことができたものであるが、この碑に刻されている天蓋は全国的にみても類例のないものであり、バン・イの種子の表現にも特長がある。

(c) 立浜地区的板碑

地区番号1(資料番号14)の碑は、雄勝町内で最大の板碑であり種子の地蔵(イ)を単独で刻しているのは石巻市周辺ではめずらしい。地区番号5(資料番号46)の板碑にはわずかではあるが金箔の痕跡が認められた。(公民館保管)

(d) 大浜地区的板碑

地区番号1・2(資料番号1・2)の弘安八年の両碑は雄勝町板碑群のなかで最古の碑であり、その内容がほとんど同じであるようなので、服部清道氏が「板碑概説」の中で双式板碑の第一分類で「同一様式のものを二基造立したもの」とされている双式板碑であろうか。

地区番号4(資料番号6)の正応の碑は、「王子の墓」と伝えられ、石神社の神官千葉氏によって祀られている。この碑の種子は大日如来(ア)、勢至菩薩(サク)、觀音菩薩(サ)の三尊種子であるが、この組み合わせ、サク・サの位置関係は類例がないようである。この碑は原位置を保つているものと思われる。

地区番号7(資料番号51)の碑は、大日如来(バ)を六行に刻しているが、おそらく他に類例のないものであろう。その意味するところはどんなことなのであろうか。今後の課題である。ア点がはつきりしているので、地区的特性として鎌倉時代の碑と思われる。

(e) 天雄寺園の板碑

地区番号3(資料番号34)の碑には、施主であろうと思われる「山下豊後」の名がある。この「山下豊後」なる人物は、下雄勝山下克郎氏の「先祖代々記」の中に記されているという。石刻史料としての板碑と文書史料が一致した極めて貴重な例である。

(f) 分浜の板碑

地区番号1(史料番号37)の碑には「夜念仏供養」のために石塔一体を刻して造立するとあり、石巻市周辺では数少ない民間信仰板碑である。さらに、この碑の側の上部に種子を刻するのではなく、「鶴」の一字を刻している。「鶴」については所説があるようであるが、字のつくりから「八白鳥」(ハッキュウ)、あるいは「鳥八白」(ウハッキュウ)と読まれているようである。「白」を「キュウ」と発音するのである。しかし、この碑では「白」ではなく、「白」の文字を使っている。「白」は「キヨク」で、「白」(キュウ)とは意味もちがう、まったくの別字である。「一考を要することではなかろうか。

6、まとめ

板碑統計61基、その内紀年銘のある38基は全体として多いとはいえない数であるかもしれない。しかし、一つ一つの板碑を検討していくと、それなりの特性を見つけることができるし、また全体をまとめて総合的に把握すると、それはそれなりにいろいろなことを観察することができる。特に雄勝町は桃生郡のうちであるが、牡鹿町、女川町、旧萩浜村(現石巻市)の板碑と結合させることによって牡鹿半島の一部と位置づけ、表(2)と図(1)・(2)を作つてみた。いわゆる「牡鹿半島の板碑」という感覚で考察を加えて見た。しかしながら年代的なひらがりとか、地域的な分布といったごく限られた分野でしか資料を提供できなかつたが、今後、機会があれば、さらに板碑の内容に踏み込んだ資料を提供したいと思っている。

この報告を通して雄勝町には雄勝町なりの板碑が存在することは立証できたと思う。板碑の地域性研究のための一つのステップになることを願つておる。

宮城県
桃生郡

雄勝町文化財

板碑分布図(全町)

◎雄勝町の板碑

船越地区		
地区番号	資料番号	記載ページ
1	8	15
2	29	16
3	40	17

熊沢地区		
地区番号	資料番号	記載ページ
1	32	18
2	33	19
3	41	19
4	42	19

羽板地区		
地区番号	資料番号	記載ページ
1	3	20
2	5	21・22
3	17	23
4	29	24
5	43	24
6	44	25

立浜地区		
地区番号	資料番号	記載ページ
1	14	26・27
2	26	28
3	30	29
4	45	29
5	46	30
6	47	30
7	48	31
8	49	32

大浜地区		
地区番号	資料番号	記載ページ
1	33	33
2	2	34
3	4	35
4	6	36・37
5	27	38
6	50	39
7	51	40
8	52	41
9	53	41

下雄勝地区		
地区番号	資料番号	記載ページ
1	10	43
2	13	44
3	54	44

雄勝字寺地区		
地区番号	資料番号	記載ページ
1	12	45
2	19	45
3	34	46
4	35	47
5	36	48
6	38	49
7	55	50

1:50,000



南三陸金華山国定公園

雄勝字寺地区

波板地区

雄勝吳堀地区

大浜地区

立浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

雄勝吳堀地区

雄勝字寺地区

立浜地区

大浜地区

熊沢地区

羽板地区

船越地区

下雄勝地区

分浜地区

分浦地区

1
（一一一三三）
元亨三年
資料番号 8
船越字天王山



右志者為幽儀才三ヶ年頼證薈之

大才
元亨三年
仲春彼岸才七番
施主
敬白

- 種子 || キリーケ（阿弥陀如來）
- 涅槃点は蓮台に乗るよう配されている。
- 玄昌石
- 三年忌の二十一尊はキリーケなので、種子と年忌は一致する。
- 羽坂の正応二年・正応三年碑の蓮台と比較することによって、雄勝町の蓮台の変遷がわかる。

高 132.0cm
幅 58.0cm
厚 6.5cm

2

年不詳

資料番号 39
船越字船越

- ・種子ヨリキカラバア（発心門）
- ・玄昌石
- ・五輪塔 花瓶は他の地区では確認され
ていない。



高 117.0cm

幅 64.0cm

厚 7.0cm

3

年不詳

船越字船越

資料番号
40

- 種子 || キヤカラバア (発心門)
- 玄昌石
- 磨滅が激しく、全体像を把握できないうが、おそらく、前頁の概観と同じであろう。



高 113.5cm

幅 74.0cm

厚 7.0cm

（熊沢地区）

1 (一四六五) 寛正六年 熊沢字熊沢 資料番号 32



高 48.0cm 幅 26.0cm 厚 4.0cm

- ・種子ニサク（勢至菩薩）
- ・粘板岩
- ・1/7

・藤井久治郎氏が氏神として祀っている。

2 (一五〇一) 明應十年 熊沢字熊沢 資料番号 33



高 70.0cm 幅 30.0cm 厚 7.0cm

- ・種子ニサ（聖觀音菩薩）が百ヶ日忌の主尊と一致する。
- ・粘板岩
- ・五十鈴神社境内に保管されている。
- ・地区番号、3、4とともに、旧道の登り口にあったとい

3 年不詳

熊沢字熊沢 資料番号 41

- ・種子ニサ（聖觀音菩薩）
- ・粘板岩
- ・五十鈴神社境内に保管されている。

高 79.0cm
幅 25.0cm
厚 5.0cm



4 年不詳

熊沢字熊沢 資料番号 42

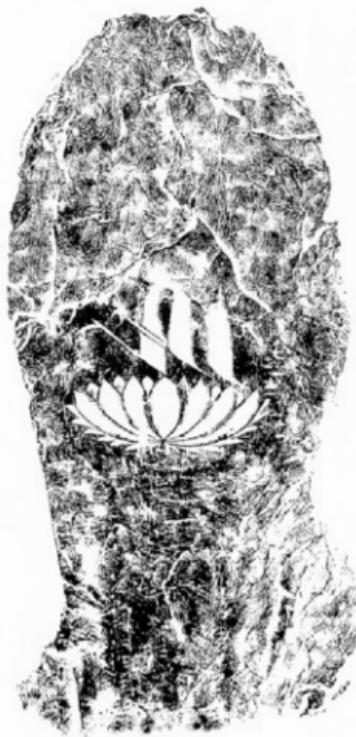
- ・種子ニサ（聖觀音菩薩）
- ・粘板岩
- ・五十鈴神社境内に保管されている。

高 118.0cm
幅 29.0cm
厚 4.0cm



（羽坂地区）

1 (二二八九) 正應二年 桑浜字羽坂
資料番号3



正應二年一月時正

己丑

□靈往生極樂

右志者為過去

- 種子ヨ残存部よりキリーケ（阿弥陀如来）と推定
- 玄昌石
- 時正是彼岸と同じ意味に使用されるので、「二月時正」は春の彼岸を指すことになる。
- 今野太郎氏により氏神として祀られている。

高 126.0cm
幅 58.0cm
厚 12.0cm

(一一九〇)
正應三年

桑浜字羽坂
資料番号: 5



高 134.0cm
幅 62.0cm
厚 10.0cm

今野太郎氏宅 氏神





- 種子ニア（胎・大日如來）
- 玄昌石
- 偲（觀無量壽佛經疏第一）
- 二重の界線がある。
- 四十九日忌の主尊はバイ（藥師如來）であるので一致しない。
- 今野太郎氏により氏神として祀られている。

(二三五二)
觀應二年

桑浜字羽坂
資料番号17



高 114.0cm

幅 53.0cm

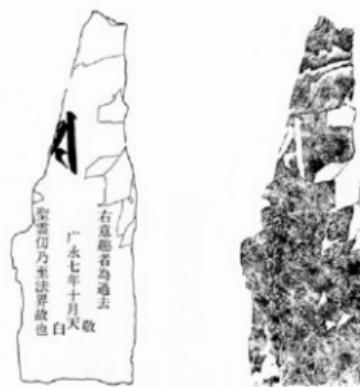
厚 9.0cm

- 種子は剥離のため判断するのが困難であるが、
- パン(金・大日如来)と推定する。
- 粘板岩
- 調整された痕跡がまったく認められない。

(一四〇〇)
応永七年

桑浜字羽坂 資料番号 29

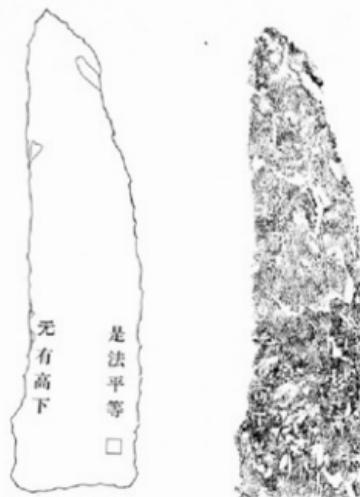
- 種子ニサ (觀音菩薩)
- 粘板岩
- 比較的厚手の碑である。



高 63.0cm 幅 20.0cm 厚 12.0cm

5 年不詳 桑浜字羽坂 資料番号 43

- 種子ニ上部剥落のため不明
- 砂岩
- 偈ニ金剛般若波羅密經



高 81.5cm 幅 23.0cm 厚 13.0cm



6 年不詳
資料番号 44

桑浜字羽坂

高 131.0cm
幅 53.0cm
厚 8.0cm

・種子バン（金・大日如來）
・粘板岩
イ（地藏菩薩）

・年不詳であるが、町内の発心点のあ
る他の板碑より類推すれば、鎌倉時
代の碑と思われる。
・この天蓋の形式は、全国でも類例の
ないものである。
・種子の下部に蓮台らしき痕跡が認め
られる。

（立浜地区）

1
（二三四五）
康永二二一年

立浜字天神 資料番号 14



高 190.0cm

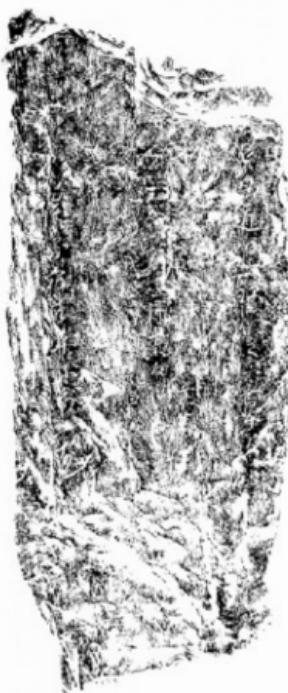
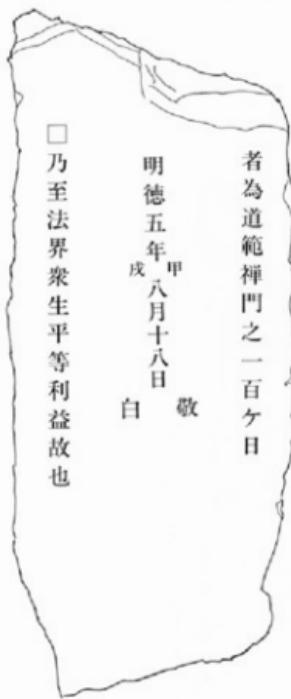
幅 72.0cm

厚 7.0cm

- ・種子ニイ（地蔵菩薩）
- ・粘板岩
- ・現在は倒伏しているが、原位置と推定される。
- ・康永四年は北朝年号、十月二十一日に貞和と改元されている。
- ・この地方に南朝が勢力を振っていたのは、興國三年（一二四一）の三迫の戦後、二年ないし三年と想定される（年号でいえば興國五年（南朝）が限界のようである。）



(一三九四)
明徳五年 立浜字天神 資料番号26



高 117.0cm
幅 47.0cm
厚 4.0cm

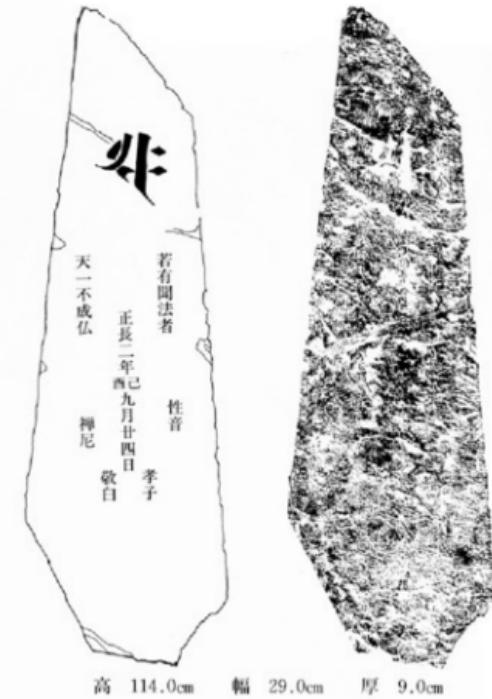
種子=上部欠落のため不明。

粘板岩

明徳五年は七月五日に応永と改元され
る。改元情報が伝わっていなかつたと思わ
れる。

3 (二四二十九) 正長二年 立浜字天神 資料番号30

- 種子=サク (勢至菩薩)
- 粘板岩
- 偈=妙法蓮華經卷一、方便品第二。
- 正長二年は九月五日に永享と改元。



4 年不詳 立浜字天神 資料番号45

- 種子=不明
- 粘板岩

1/6

□出離解脫□息□
辛□婆功德者滅罪生善

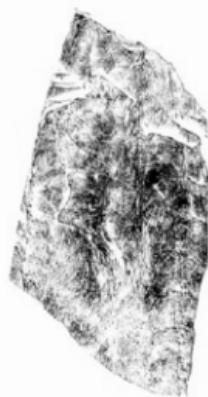
高 40.0cm 幅 24.0cm 厚 4.0cm

5

年不詳

立浜字天神

資料番号 46



高 65.0cm

幅 32.0cm

厚 4.0cm

6 年不詳

立浜字天神

資料番号 47



高 65.0cm 幅 37.0cm 厚 4.0cm

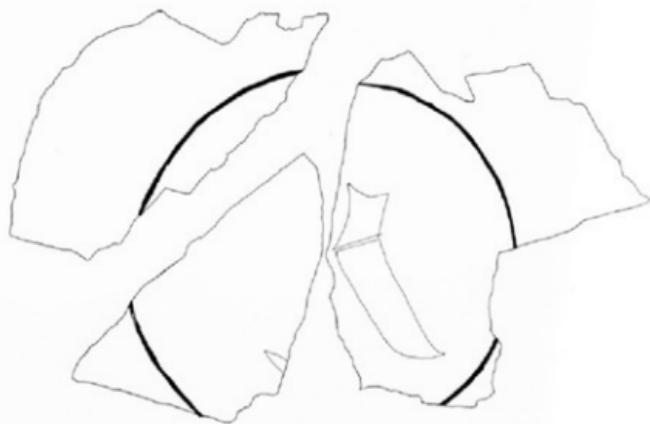
- 種子 || 不明
- 粘板岩
- 儒 = 法華經第五安樂行品第十四
- 文字の隨所に金泊の痕跡あり。

- 種子 || 不明
- 玄昌石

年不詳

立浜字天神

資料番号 48



1/5
・ 細板岩
・ 月輪の直径約32cm
・ 高さも2m近く
・ 一度破碎され、埋められていたもの
・ 種子の痕跡あり
・ 厚さも21cmと厚く
・ 破碎される前は、

高 37.0cm
幅 57.0cm
厚 21.0cm

年不詳

立浜字天神 資料番号 49



• 1/5

• 玄昌石

(胎・大日如來)

種子ニアーチ

高 24.0cm

幅 17.0cm

厚 3.0cm

立浜全貌





高 103.0cm

幅 64.0cm

厚 10.0cm

1 (二二八五)
弘安八年

大浜字袖浜

資料番号 1



- ・種子ニア（胎・大日如来）
- ・玄昌石
- ・文字の彫り方が極端に浅い。
- ・原位置は千葉貞四郎氏宅の屋敷角に当るという。船越に通じる旧道筋になる。



2

(二二八五)
弘安八年

大浜字抽浜 資料番号 2

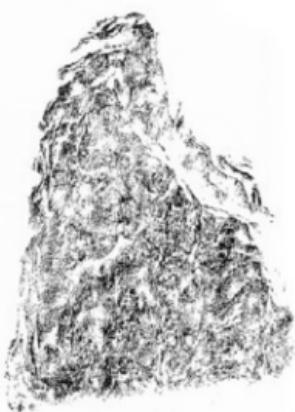
高 102.0cm
幅 63.0cm
厚 10.0cm



- 種子ヨア（胎・大日如來）
- 玄昌石
- 前出の弘安八年碑と種子、銘文の書き方が酷似している。更に碑全体の大きさもほぼ同じである。両碑ともに悲母のために造立しているので、双碑と考えたいが、研究の余地あり。

(二二八九)
正广二年

大浜字袖浜 資料番号 4



• 種子 = 不明
玄昌石

高 71.0cm
幅 58.0cm
厚 6.0cm

〔大浜・中道圓板碑群〕



(一九三二)
正广口年

大浜字大浜

資料番号6



高 146.0cm

幅 67.0cm

厚 6.0cm

- ・種子ニア（胎・大日如來）・サク（勢至菩薩）・サ（觀音菩薩）三尊のこの配列は他に類例がない。
- ・粘板岩
- ・原位置を保っていると思われる。
- ・石神社の一偶にあり、王子の墓と伝える。



右者為過去幽儀聖靈

正广年刀六月

□□極樂往生

(一三九〇—一九三)
明德

大浜字大浜
資料番号27



高 153.0cm
幅 50.0cm
厚 7.0cm

- 種子 || キリーケ
- (阿弥陀如来)
- 玄昌石
- 種子の書き方に特徴がある。
- 千葉裕之氏前山の阿弥陀堂の裏に他の三基とともにある。

- ・種子＝痕跡があるも判斷できず。
- ・粘板岩
- ・王子の墓と同じ匁いの中にある。

高 98.0cm

幅 29.0cm

厚 7.0cm



（大浜石神社内板碑）

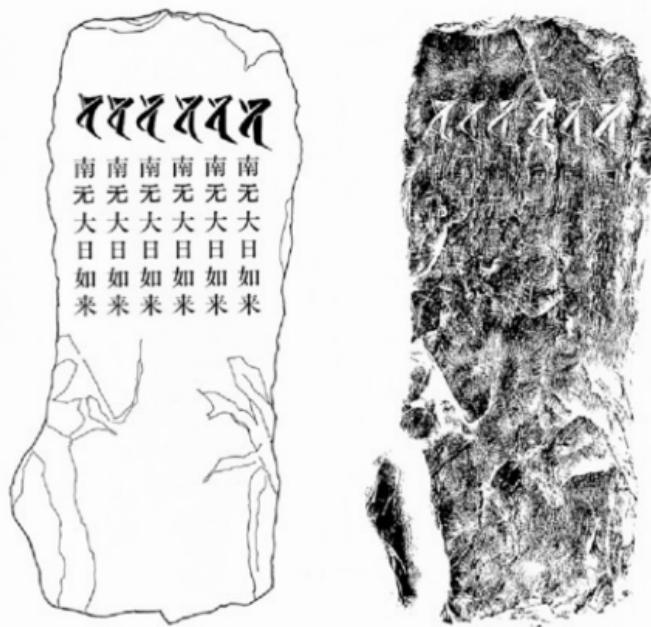


7

年不詳

大浜字大浜

資料番号51



高 104.0cm
幅 42.0cm
厚 5.5cm

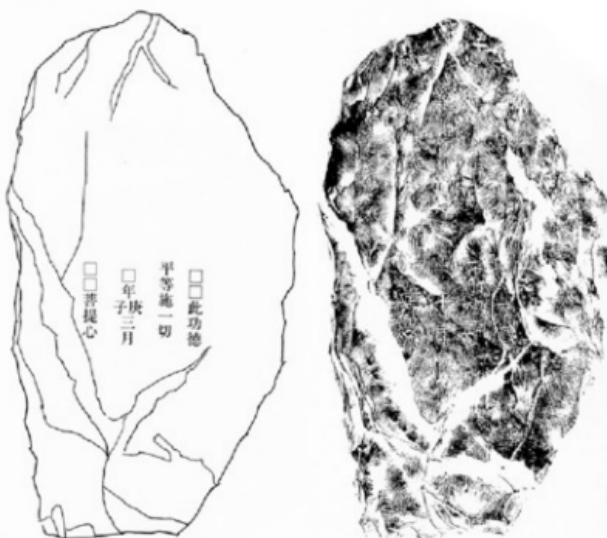
種子 II バ (金・大日如来)

玄昌石

- 発心点があるところから鎌倉時代と推定される。
- 六列のバ南无大日如来は全国でも類例が見当たらないのではないか。
- 千葉裕之氏前山の阿弥陀堂裏に他の三基とともにある。

8 年不詳 大浜字大浜 資料番号 52

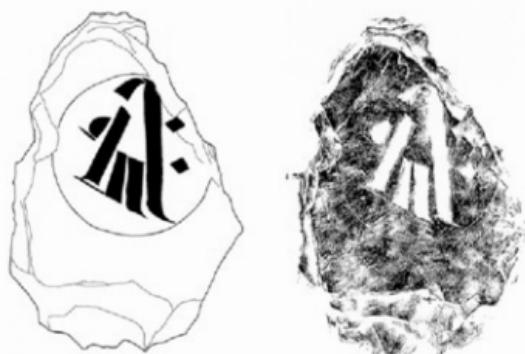
・ 玄昌石
・ 偈 = 観無量佛經疏卷第一



高 90.0cm 幅 48.0cm 厚 5.0cm

9 年不詳 大浜字大浜 資料番号 53

・ 種子 = キリーケ (阿弥陀如來)
・ ア点 (命点) から鎌倉時代と推定される。



高 58.0cm 幅 40.0cm 厚 4.0cm

（下雄勝地区）

1 (一三二二八)
嘉平三年 雄勝字下雄勝 資料番号9



・種子 || バン (金・大日如來)
上部が欠落しているので、判然としないが、バンと判読しておく。
・粘板岩

高 85.0cm
幅 51.0cm
厚 6.0cm



2

(一三三六)
延元□年
雄勝字下雄勝

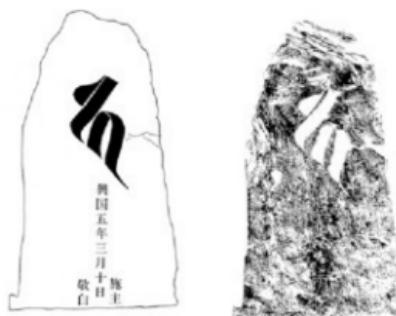
資料番号 10

高 138.0cm
幅 59.0cm
厚 10.0cm

種子ニ阿弥陀三尊

玄昌石

・偈ニ法華經第一、譬喻品第三
・裏山に寺があつたと伝え、以下の二
基とともに、崖崩れの際に、上から
流れ落ちて来たものという。

(一三四四)
興國五年雄勝字下雄勝
資料番号 13

高 50.0cm

幅 25.0cm

厚 7.0cm

雄勝字下雄勝
資料番号 54

高 55.0cm

幅 24.0cm

厚 8.0cm

- ・種子==力 (地蔵菩薩)
- ・玄昌石
- ・種子の左下方に改刻と思われる痕跡がある。

- ・種子==カーン (不動明王)
- ・玄昌石
- 空点を改刻の痕跡と考えると、カーン (普賢菩薩) となる。

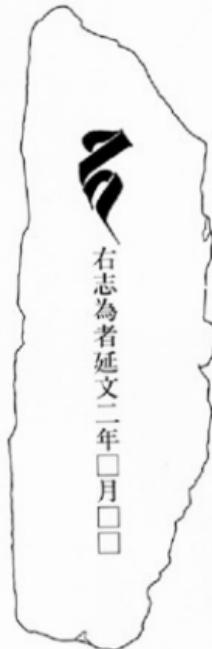
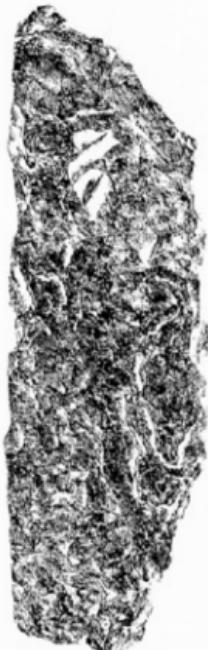
（雄勝字寺地区）

1
（一一三五七）
興國五年 雄勝字寺 資料番号 12

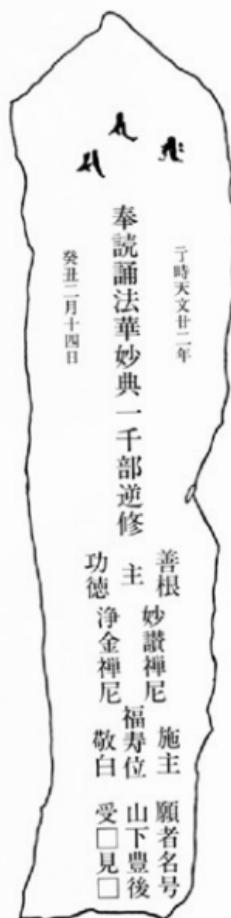
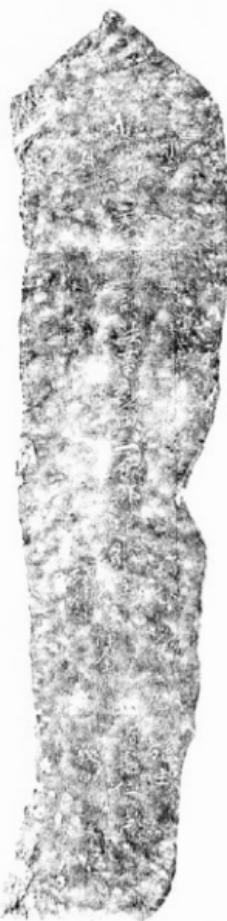


・種子ノ力（地藏菩薩）
・玄昌石
高 79.0cm
幅 30.0cm
厚 5.0cm

2
（一一三五七）
延文二年 雄勝字寺 資料番号 19



・種子ノ力（地藏菩薩）
・粘板石
高 110.0cm
幅 34.0cm
厚 7.5cm



- ・種子＝バ・キリーケ・サの三尊種子か。
- ・砂岩？
- ・逆修供養塔として造立されているようであるが、山下豊後と妙讚禪尼と
淨金禪門の関係はどうなのであろうか。
「山下豊後」は、山下克郎氏の「先祖代々記」に記載されている。

高 155.0cm

幅 34.0cm

厚 35.0cm

(一五八二)
天正十年

雄勝字寺 資料番号 35



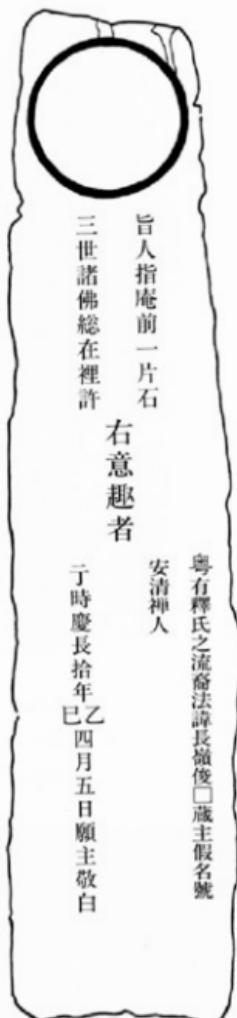
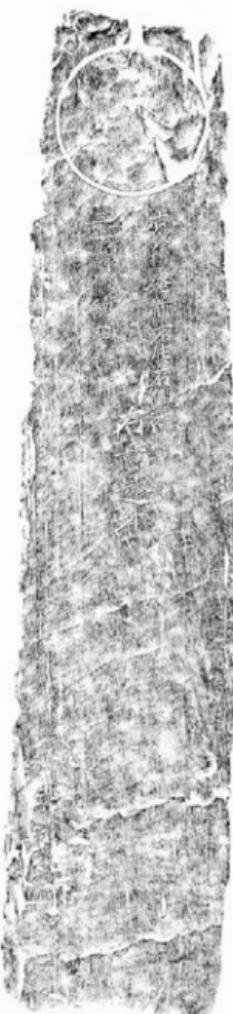
高 112.0cm

幅 39.0cm

厚 10.0cm



- 種子 || キヤカラバア・パン
- 玄昌石
- 偕 || 菩薩經第十

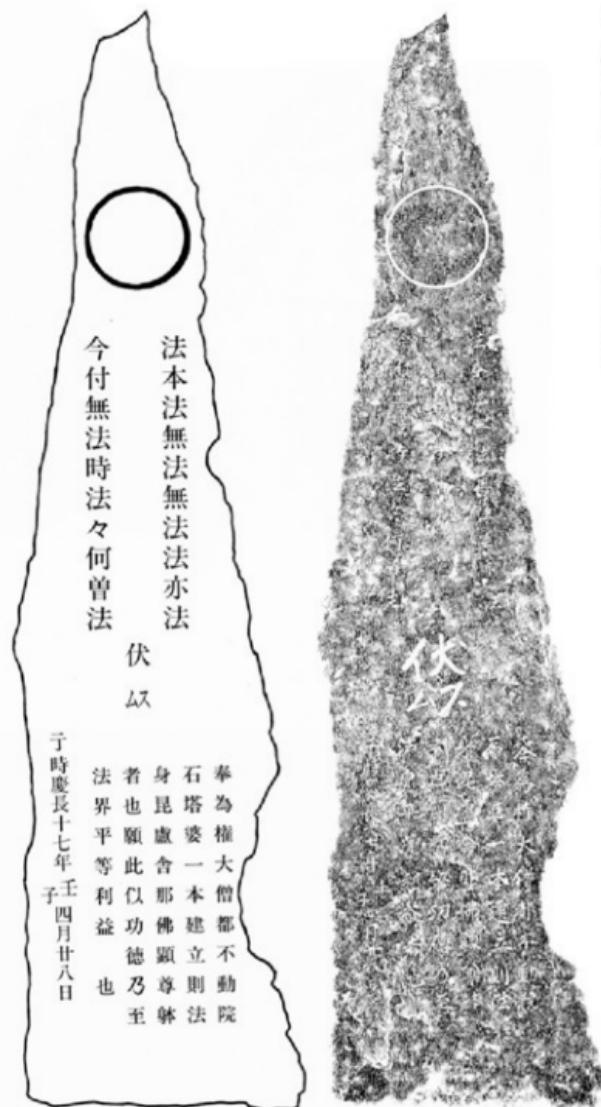


- ・種子＝月輪のみにて、種子は確認されない。この型式は江戸時代の墓碑の先駆的なものであろうか。
- ・粘板岩
- ・偈＝出典不明
- ・釋氏は釈迦の略称。ここでは仏法を信奉する人と同義に使用されているか。

高 173.0cm 幅 37.0cm 厚 13.0cm

- 種子三月輪のみで種子は確認されない。
- 粘板岩
- 偶=出典不明
- 權大僧都不動院は不明

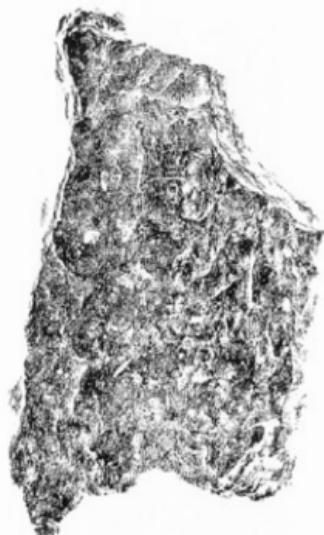
1 / 13



年不詳

雄勝字寺

資料番号 55



粘板岩
上部欠落のため詳細は不明

高 90.0cm

幅 48.0cm

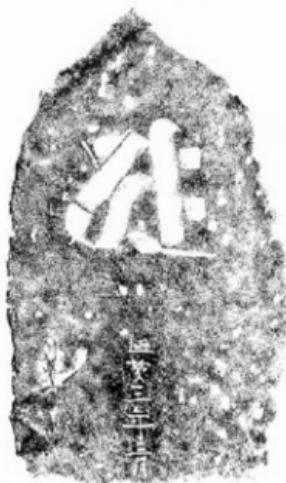
厚 7.0cm



〔天雄寺圓板碑群〕

（雄勝與臺地区）

1 (一一一〇)
延慶三年 雄勝字與臺 資料番号7



高 81.0cm

幅 44.0cm

厚 7.0cm

種子ニアタ（胎・大日如來）

砂岩

表面はおおよそ平らに調整されている。

種子の涅槃点が正方形になつていて、等、書き方に特徴がある。

(二三四四)
康永三年

雄勝字與壹
資料番号11



康永三年十一月九
白日敬

高 100.0cm
幅 40.0cm
厚 10.0cm

種子力 (地藏菩薩)

種子力

(地藏菩薩)

玄昌石
康永三年 (北朝) は興國五年
(南朝)
種子力の書き方に特徴あり。
に当る。

(一三四四六年)
貞和二年

雄勝字吳壹 資料番号15



高 80.0cm
幅 28.0cm
厚 6.0cm

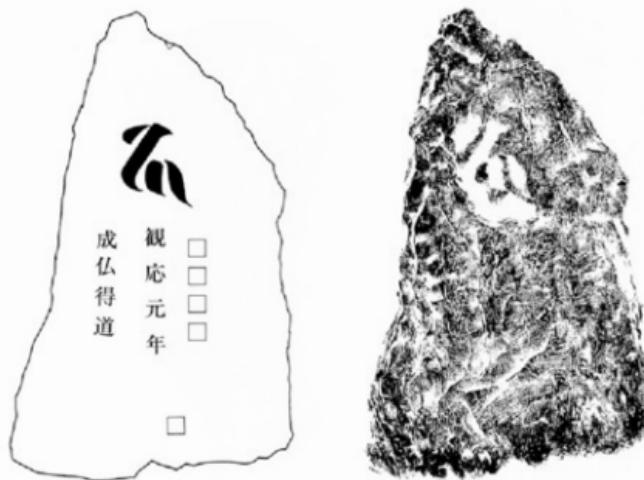
種子ニタラーク（虚空藏菩薩）

玄昌石

石巻地域のタラーカの表われ方から類推すると、
十三仏の三十三回忌の主尊とも考えられる。

(二三五〇)
觀応元年

雄勝字與壹 資料番号 16



- 種子 || 力 (地藏菩薩)
- 磨滅が激しく、判読が困難であったが、
- 拓本より力と推定する。
- 玄昌石
- 僧 || 出典不明

高 80.0cm

幅 44.0cm

厚 7.0cm

(二三五六)
文和五年

雄勝字吳大塗 資料番号 18



- 種子=パン (金・大日如來)
- 空点左側の点は、改刻再利用の痕跡であろうか。
- 粘板岩
- 文和五年は三月二十八日に延文と改元されている。
- 種子の左側にて二つに分離している。

高 101.0cm

幅 47.0cm

厚 9.0cm

(一三三六八)
應安元年雄勝字呉壹
資料番号20

高 96.0cm

幅 35.0cm

厚 7.0cm

・種子 || バン (金・大日如來)

・莊嚴点あり。

・玄昌石

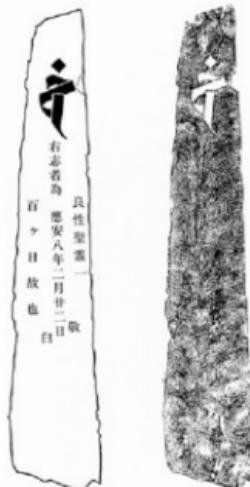
・種子の部分より中央部を平らに調整している。

・銘文も「過去聖靈・往生故也」と比較的簡単に表現している。

(一三七五) 雄勝字吳壺 資料番号21

- ・種子 || バン (金・大日如來)
- ・玄昌石
- ・良性の一百ヶ日忌のための造立である。十三仏における百ヶ日忌の主尊はサ(觀音)である。

高 83.0cm
幅 15.0cm
厚 5.0cm



(一三六八—一三七四) 雄勝字吳壺 資料番号22

- ・種子 || 力 (地藏菩薩)
- ・玄昌石
- ・種子力の書体はこの地域独特のものである。

高 86.0cm 幅 24.0cm 厚 8.0cm



(二三七八)
永和四年

雄勝字興壹 資料番号 23



高 84.0cm

幅 31.0cm

厚 8.0cm

種子 || 力 (地藏菩薩)

玄昌石

偈 || 法華經方便品第二

銘文なし。石巻市の板碑とくらべて全体として
簡略化されている感じがする。

永和二年(一三七八)

雄勝字吳壺 資料番号24



高 78.0cm
幅 38.0cm
厚 5.5cm

上部欠落のため種子不明

玄昌石

これは「□仏土中・有一乗法」とのみ確認できるが、
法華經第便品第二を出典する「十方仏土中 唯有
一乗法 無二亦無三 除仏方便談」の前三句であ
る。

(二三七五一—二三一八)

雄勝字與壹 資料番号 25



- 種子=カ (地藏菩薩)
- 玄昌石
- 中央左寄りに傷の一部とみられる「生」の一字がある。

高 57.0cm
幅 28.0cm
厚 3.5cm

(二三九九) 雄勝字與壹

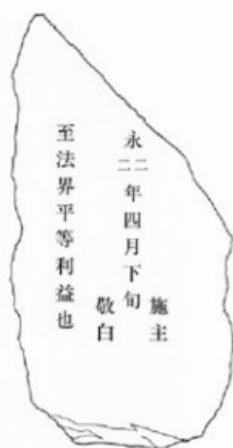
雄勝字與壹 資料番号 28



- 種子=サ (觀音菩薩)
- 粘板岩

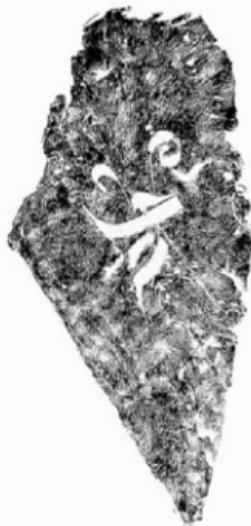
高 116.0cm
幅 29.0cm
厚 6.5cm

- ・種子＝上部欠落のため不明。
- ・玄昌石
- ・状態から判断して、應永碑ではないだろうか。

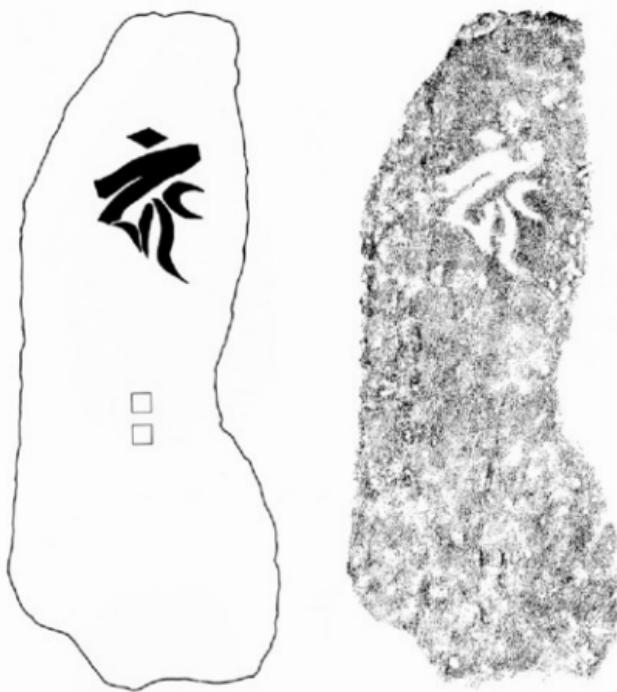


高 76.0cm 幅 39.5cm 厚 5.0cm

- ・種子＝バイ（薬師如來）
- ・玄昌石
- ・七七日忌の碑か。
- ・種子アイ点の右側に改刻再利用の痕跡あり。



高 88.0cm 幅 42.0cm 厚 6.0cm



種子ミカーン（不動明王）
砂岩
十三仏の配列から、初七日忌の造立と推定される。

高 115.0cm
幅 43.0cm
厚 10.0cm

16

年不詳

雄勝字呉壹

資料番号59

- 種子＝上部剥離のため不明
- 玄昌石
- 偈は加藤正久氏による源信作の
「仏成道 観見法界 草木園
悉皆成仏」であろう。



高 80.0cm 幅 26.0cm 厚 3.0cm

17

年不詳

雄勝字呉壹

資料番号60

- 種子＝上部剥離のため不明
- 玄昌石



高 72.0cm 幅 30.0cm 厚 5.0cm

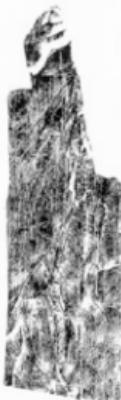
年不詳

雄勝字興壹

資料番号 61

• 種子 || 不明
玄昌石

高 67.0cm
幅 20.0cm
厚 10.0cm



〈興壹圓板碑群〉



（分浜地区）

1 慶長十五年（一六一〇） 分浜字分浜 資料番号 37



高 160.0cm
幅 53.0cm
厚 6.0cm



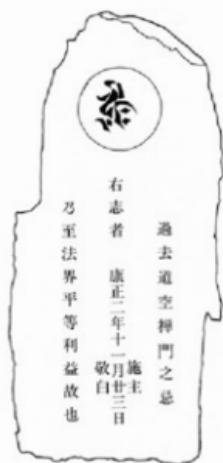
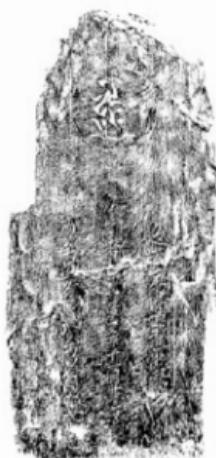
鵠
見十方佛
深入禪定
伏ム
鳥在見宿庵三唱初夜
後夜念佛為其供養并
奉石塔一体刻立者也

豈慶長拾五年庚戌十月吉日

種子なし、「鵠」の文字が上部に刻されている。ただし「白」の部分は「白」の文字になっている。
偈妙法蓮華經第五、安樂行品第十四
玄昌石
夜念佛供養の碑となつてゐる。

（波板地区）

1 康正二年 分浜字波板 資料番号 31
 (四五五六)



高 77.0cm 幅 34.0cm 厚 4.0cm

（十三仏種子）

（基本種子）

（十三仏（本地化））

（忌日）

不動明王

初七日

二七日

觀音菩薩

三七日

四七日

地藏菩薩

五七日

六七日

藥師如來

七七日

八七日

彌勒菩薩

九七日

一七日

般若菩薩

二七日

三七日

巴伊・ベイ

四七日

五七日

サク

六七日

七七日

サ

八七日

九七日

バ

一七日

二七日

キリーケ

三七日

四七日

ウン

五七日

六七日

バン・(ア)

七七日

八七日

タラーク

九七日

一七日

一七日

二七日

虚空藏菩薩

三七日

四七日

・種子＝キリーケ（阿弥陀如來）

・粘板岩
 ・藏屋敷といわれる現鈴木盛氏宅の後に
 あつたものという。

資

料

出典	法名	真言 etc	所在	石材	高	幅	厚
			天王山 船越小学校向い	玄昌石	132	58	6.5
		天蓋花瓶五輪塔	船魂神社	玄昌石	117	64	7
		天蓋・五輪塔？	船魂神社	玄昌石	113.5	74	7

出典	法名	真言 etc	所在	石材	高	幅	厚
不明	常光禪門		藤井久治郎氏宅裏	粘板岩	48	26	4
	道椿禪門		五十鈴神社	粘板岩	70	30	7
			五十鈴神社	粘板岩	79	25	5
			五十鈴神社	粘板岩	118	29	4

出典	法名	真言 etc	所在	石材	高	幅	厚
		蓮台	今野太郎氏宅	玄昌石	126	58	12
觀無量寿仏經第 一		蓮台	今野太郎氏宅	玄昌石	134	62	10
			永沼伊勢夫氏宅	粘板岩	114	53	9
			永沼伊勢夫氏宅	粘板岩	63	20	12
金剛般若波羅密經			永沼伊勢夫氏宅	砂岩	81.5	23	13
		天蓋に特徵	永沼伊勢夫氏宅	粘板岩	131	53	8

出典	法名	真言 etc	所在	石材	高	幅	厚
	慈悲阿弥陀仏		鈴木弘氏宅裏	粘板岩	190	72	7
	道範禪門		鈴木弘氏宅裏	粘板岩	117	47	4
法華經第一 方便品第二	性音禪尼		鈴木弘氏宅裏	粘板岩	114	29	9
		卒口婆功德者 減罪生善	鈴木弘氏宅裏	粘板岩	40	24	4
法華經第五 安樂行品第十四	真崩上座	金棺の痕跡あり	鈴木弘氏宅裏	粘板岩	65	32	4
		右志者子口型盡	鈴木弘氏宅裏	玄昌石	65	37	4
			鈴木弘氏宅裏	粘板岩	37	57	21
			鈴木弘氏宅裏	玄昌石	24	17	3

出典	法名	真言 etc	所在	石材	高	幅	厚
		悲母	千葉貞四郎氏宅	玄昌石	103	64	10
		悲母	千葉貞四郎氏宅	玄昌石	102	63	10
			千葉貞四郎氏宅	玄昌石	71	58	6
	王子の墓		石神社	粘板岩	146	67	6
			千葉裕之氏宅	玄昌石	153	50	7
			王子の墓右側	粘板岩	98	29	7

地区別一覧

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
8	1	船 越	元亨三年大才仲春 彼岸第七番	1323	キリーク	第三年	
39	2	船 越			発心門		
40	3	船 越			発心門		

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
32	1	熊 泽	寛正六年正月十二日	1465	サク		應無所住 衆生其身
33	2	熊 泽	明應十年辛酉	1501	サ		大日如來
41	3	熊 泽	永六年□月□		サ		
42	4	熊 泽			サ		

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
3	1	羽 坂	正應二年己丑二月時正	1289	キリーク		
5	2	羽 坂	正應三年庚寅六月十日	1290	ア	四十九日忌	願以此功德 平等施一切 同發菩提心 往生安樂國
17	3	羽 坂	般應二十一日	1351	パン	一周忌	
29	4	羽 坂	応永七年十月天	1400	サ		
43	5	羽 坂					是法平等 無有高下
44	6	羽 坂			パン		

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
14	1	立 浜	康永二年九月	1345	イ		
26	2	立 浜	明徳五年八月十八日	1394		一百ヶ日	
30	3	立 浜	正長二年九月廿四日	1429	サク		若有開法者 無一不成仏
45	4	立 浜					
46	5	立 浜				七年忌	深入禪定 見十方佛
47	6	立 浜					
48	7	立 浜			痕跡		
49	8	立 浜			アク		

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
1	1	大 浜	弘安八年十一月五日	1285	ア		
2	2	大 浜	弘安八年十一月	1285	ア		
4	3	大 浜	正廣二年四月	1289			
6	4	大 浜	正廣□年六月	1293	三尊		
27	5	大 浜	明徳		キリーク		
50	6	大 浜			痕跡		

出 典	法 名	真 言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
		八南无大日如来 八南无大日如来 八南无大日如来 八南无大日如来 八南无大日如来 八南无大日如来	千葉裕之氏宅	玄昌石	104	42	5.5
觀無量壽佛經疏卷第一			千葉裕之氏宅	玄昌石	90	48	5
	月輪		千葉裕之氏宅	玄昌石	58	40	4

出 典	法 名	真 言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
			山崎浩氏宅	粘板岩	85	51	6
法華經譬喻品第三			山下十二氏宅	玄昌石	138	59	10
			山下十二氏宅	玄昌石	50	25	7
	慈父幽靈		山下十二氏宅	玄昌石	55	24	8

出 典	法 名	真 言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
			天雄寺	玄昌石	79	30	5
			天雄寺	粘板岩	110	34	7.5
	妙讚禪尼 淨金禪門	奉說謡法華妙典 一千部 福壽位 山下豐後	天雄寺	砂 岩	155	34	35
華嚴經第十	追柏禪門		天雄寺	玄昌石	112	39	10
		粵有釋氏之流裔法 諱長嶺俊口號主假 名安清禪人	天雄寺	粘板岩	173	37	13
不明		奉為惟大僧都不動 院石塔婆一本建立 則法身是虛那佛顯 尊勝者也 願此以 功德乃至法界平等 利益也	天雄寺	粘板岩	243	57	14
			天雄寺	粘板岩	90	48	7

出 典	法 名	真 言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
			造船碑脇	砂 岩	81	44	7
			造船碑脇	玄昌石	100	40	10
			造船碑脇	玄昌石	80	28	6
			造船碑脇	玄昌石	80	44	7
			造船碑脇	粘板岩	101	47	9

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
51	7	大 浜					
52	8	大 浜	□年三月				□□此功德 平等施一切 □□菩提心
53	9	大 浜			キリーグ		

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
9	1	下 雄 藤	嘉平三年九月十七日	1328	パン		
10	2	下 雄 藤	延元□丙子□月二日	1336	アミダ三尊	逆修善根	今此三眾 皆是我有 其中衆生 □□吾子
13	3	下 雄 藤	興国五年三月十日	1344	カ		
54	4	下 雄 藤			カーン		

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
12	1	雄勝字寺	興国五年三月十日	1344	カ		
19	2	雄勝字寺	延文二年□月□日	1357	カ		
34	3	雄勝字寺	天文廿二年二月十四日	1553	アミダ三尊	逆修善根	
35	4	雄勝字寺	天正十年□月日	1582	キテ カラ バア パン		心佛及衆生 是□無差別
36	5	雄勝字寺	慶長拾年乙巳四月五日	1605	月輪		盲人指庵前一片石 三世諸佛總在裡許
38	6	雄勝字寺	慶長十七年四月廿八日	1612	月輪		法本法無法 無法法亦法 今付無法時 法々何曾法
55	7	雄勝字寺	年三月日				

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
7	1	興 壺	延慶三年三月	1310	アク		
11	2	興 壺	康永三年十一月九日	1344	カ		
15	3	興 壺	貞和二年三月日	1346	タラーク		
16	4	興 壺	觀応元年	1350	カ		□□□□成仏得道
18	5	興 壺	文和五年四月廿日	1356	パン		

出典	法名	真言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
			造船碑脇	玄昌石	96	35	7
	良性聖靈		造船碑脇	玄昌石	83	15	5
			造船碑脇	玄昌石	86	24	8
法華經方便品 第二			造船碑脇	玄昌石	84	31	8
法華經方便品 第二			造船碑脇	玄昌石	78	38	5.5
			造船碑脇	玄昌石	57	28	3.5
			造船碑脇	粘板岩	116	29	6.5
			造船碑脇	玄昌石	76	39.5	5
			造船碑脇	玄昌石	88	42	6
			造船碑脇	砂岩	115	43	10
源信作			造船碑脇	玄昌石	80	26	3
			造船碑脇	玄昌石	72	30	5
	極樂故也		造船碑脇	玄昌石	67	20	10

出典	法名	真言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
法華經卷第五 安樂行品第十四		尊在見宿庵三唱初夜 後夜念佛為其供養并 奉石塔一體刻立者也	高源院の脇山	玄昌石	160	53	6

出典	法名	真言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
	道空桺門		阿部恒夫氏宅	粘板岩	77	34	4

資料	No	地区名	年 代	西曆	種 子	年 忌	偈
20	6	吳 壺	應安元八月日	1368	パン		
21	7	吳 壺	應安八年二月廿二日	1375	パン	一百ヶ日	
22	8	吳 壺	應安		カ		
23	9	吳 壺	永和四年卯月廿二日	1378	カ		十方仏土中 唯有一乘法 無二亦无三 除仏方便說
24	10	吳 壺	永和二年六	1378			□仏土中 有一乘法
25	11	吳 壺	永和		カ		
28	12	吳 壺	應永六年二月日	1399	サ		
56	13	吳 壺	永二年四月下旬				
57	14	吳 壺			バイ		
58	15	吳 壺			カーン		
59	16	吳 壺	□月二十三日				□見法界
60	17	吳 壺	二月二十三日				
61	18	吳 壺					

資料	No	地区名	年 代	西曆	種 子	年 忌	偈
37	1	分 池	慶長拾五年十月吉日	1610			深入禪定 見十方佛

資料	No	地区名	年 代	西曆	種 子	年 忌	偈
31	1	波 板	康正二年十一月廿三日	1456	キリーク		

出典	法名	真言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
觀無量寿佛經疏第一	悲母	千葉貞四郎氏宅	玄昌石	103	64	10	
	悲母	千葉貞四郎氏宅	玄昌石	102	63	10	
	蓮台	今野太郎氏宅	玄昌石	126	58	12	
		千葉貞四郎氏宅	玄昌石	71	58	6	
	蓮台	今野太郎氏宅	玄昌石	134	62	10	
法華經品第三	王子の墓	石神社	粘板岩	146	67	6	
		造船碑脇	砂岩	81	44	7	
		天王山 船越小学校向い	玄昌石	132	58	6.5	
		山崎浩氏宅	粘板岩	85	51	6	
		山下十二氏宅	玄昌石	138	59	10	
慈悲阿弥陀仏		造船碑脇	玄昌石	100	40	10	
		天雄寺	玄昌石	79	30	5	
		山下十二氏宅	玄昌石	50	25	7	
		鈴木弘氏宅裏	粘板岩	190	72	7	
		造船碑脇	玄昌石	80	28	6	
法華經方便品第二		造船碑脇	玄昌石	80	44	7	
		永沼伊勢夫氏宅	粘板岩	114	53	9	
		造船碑脇	粘板岩	101	47	9	
		天雄寺	粘板岩	110	34	7.5	
		造船碑脇	玄昌石	96	35	7	
法華經方便品第二	良性聖塗	造船碑脇	玄昌石	83	15	5	
		造船碑脇	玄昌石	86	24	8	
		造船碑脇	玄昌石	84	31	8	
		造船碑脇	玄昌石	78	38	5.5	
		造船碑脇	玄昌石	57	28	3.5	
法華經第一 方便品第二	道範揮門	鈴木弘氏宅裏	粘板岩	117	47	4	
		千葉裕之氏宅	玄昌石	153	50	7	
		造船碑脇	粘板岩	116	29	6.5	
		永沼伊勢夫氏宅	粘板岩	63	20	12	
		鈴木弘氏宅裏	粘板岩	114	29	9	
不明	道空揮門	阿部恒夫氏宅	粘板岩	77	34	4	
	常光揮門	藤井久治郎氏宅 裏	粘板岩	48	26	4	
	道椿揮門	五十鈴神社	粘板岩	70	30	7	

年代順一覧

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
1	1	大 湾	弘安八年十一月五日	1285	ア		
2	2	大 湾	弘安八年十一月	1285	ア		
3	1	羽 坂	正應二年己丑二月時正	1289	キリーケ		
4	3	大 湾	正廣二年四月	1289			
5	2	羽 坂	正應三年庚寅六月十日	1290	ア	四十九日忌	願以此功德 平等施一切 同發菩提心 往生安樂國
6	4	大 湾	正廣二年六月	1293	三尊		
7	1	吳 塔	延慶三年三月	1310	アク		
8	1	船 越	元亨三年人才仲春 彼岸第七番	1323	キリーケ	第三年	
9	1	下 雄 勝	嘉定三年九月十七日	1328	パン		
10	2	下 雄 勝	延元二丙子二月二日	1336	アミダ 三尊	逆修善根	今此三界 皆是我有 其中衆生 □□吾子
11	2	吳 塔	康永三年十一月九日	1344	カ		
12	1	雄勝寺	興國五年三月十日	1344	カ		
13	3	下 雄 勝	興國五年三月十日	1344	カ		
14	1	立 湾	康永二年九月	1345	イ		
15	3	吳 塔	貞和二年三月日	1346	タラーク		
16	4	吳 塔	觀応元年	1350	カ		□□□□成仏得道
17	3	羽 坂	觀應二十一日	1351	パン	一週忌	
18	5	吳 塔	文和五年四月廿日	1356	パン		
19	2	雄勝寺	延文二年二月二日	1357	カ		
20	6	吳 塔	應安元八月日	1368	パン		
21	7	吳 塔	應安八年二月廿二日	1375	パン	一百ヶ日	
22	8	吳 塔	應安		カ		
23	9	吳 塔	永和四年卯月廿二日	1378	カ		十方仏土中 唯有一乘法 無二亦無三 除仏方便說
24	10	吳 塔	永和二年六	1378			□仏土中 有一乘法
25	11	吳 塔	永和		カ		
26	2	立 湾	明德五年八月十八日	1394		一百ヶ日	
27	5	大 湾	明德		キリーケ		
28	12	吳 塔	應永六年二月日	1399	サ		
29	4	羽 坂	応永七年十月天	1400	サ		
30	3	立 湾	正長二年九月廿四日	1429	サク		若有聞法者 无一不成仏
31	1	波 板	康正二年十一月廿三日	1456	キリーケ		
32	1	熊 沢	寛正六年正月十二日	1465	サク		應無所住 衆生其身
33	2	熊 沢	明應十年辛酉	1501	サ		大日如來

出典	法名	真言 etc	所在	石材	高	幅	厚
	妙讚淨尼 淨金淨門		天雄寺	砂岩	155	34	35
華嚴經第十	道棺淨門		天雄寺	玄昌石	112	39	10
		釋氏之流裔法 諱長顯俊□藏主假 名安清淨人	天雄寺	粘板岩	173	37	13
法華經卷第五 安樂行品第十四		尊在見宿庵主	高源院の脇山	玄昌石	160	53	61
不明		奉為權大僧都不動 院石塔要一本建立 則法身是虛那佛顯 尊跡者也。願此以 功德乃至法界平等 利益也。	天雄寺	粘板岩	243	57	14
		天蓋花瓶・五輪塔	船魂神社	玄昌石	117	64	7
		天蓋・五輪塔？	船魂神社	玄昌石	113.5	74	8
			五十鈴神社	粘板岩	79	25	5
			五十鈴神社	粘板岩	118	29	4
			水沼伊勢夫氏宅	砂岩	81.5	23	13
		天蓋に特徵 辛口婆功德者 滅罪生善	水沼伊勢夫氏宅	粘板岩	131	53	8
			鈴木弘氏宅裏	粘板岩	40	24	4
法華經第五 安樂行品第十四	真翁上座	金箔の痕跡あり	鈴木弘氏宅裏	粘板岩	65	32	4
		右志者子口幽靈	鈴木弘氏宅裏	玄昌石	65	37	4
			鈴木弘氏宅裏	玄昌石	37	57	21
			鈴木弘氏宅裏	粘板岩	24	17	3
			王子の墓右側	粘板岩	98	29	7
		バ南无大日如來 バ南无大日如來 バ南无大日如來 バ南无大日如來 バ南无大日如來 バ南无大日如來	千葉裕之氏宅	玄昌石	104	42	5.5
般無量壽佛經疏卷 第一			千葉裕之氏宅	玄昌石	90	48	5
		月輪	千葉裕之氏宅	玄昌石	58	40	4
	慈父幽靈		山下十二氏宅	玄昌石	55	24	8
			天雄寺	粘板岩	90	48	7
			造船碑脇	玄昌石	76	39.5	5
			造船碑脇	玄昌石	88	42	6
			造船碑脇	砂岩	115	43	10
源信作			造船碑脇	玄昌石	80	26	3
			造船碑脇	玄昌石	72	30	5
		極樂故也	造船碑脇	玄昌石	67	20	10

資料	No	地区名	年 代	西暦	種 子	年 忌	偈
34	3	雄勝字寺	天文廿二年二月十四日	1553	アミダ 三尊	逆修善根	奉誦詠法華妙典一千部 福寿位 山下豈後
35	4	雄勝字寺	天正十年□月日	1582	不明		心佛及衆生
36	5	雄勝字寺	慶長拾年乙巳四月五日	1605	月輪		旨人指庵前一片石 三世諸佛總在裡許
37	1	分 浜	慶長拾五年十月吉日	1610			深入押定 見十方佛
38	6	雄勝字寺	慶長十七年四月廿八日	1612	月輪		法本法無法 無法法亦法 今付無法時 法々何曾法
39	2	船 越			発心門		
40	3	船 越			発心門		
41	3	熊 沢	永六年□月□		サ		
42	4	熊 沢			サ		
43	5	羽 坂					是法平等 無有高下
44	6	羽 坂			パン		
45	4	立 浜					
46	5	立 浜				七年忌	深入押定 見十方佛
47	6	立 浜					
48	7	立 浜			痕跡		
49	8	立 浜			アク		
50	6	大 浜			キリーグ?		
51	7	大 浜					
52	8	大 浜	□年三月				□□此功德 平等施一切 □□菩提心
53	9	大 浜			キリーグ		
54	4	下 雄 勝			カーン		
55	7	雄勝字寺	年三月日				
56	13	興 壺	永二二年四月下旬				
57	14	興 壺			バイ		
58	15	興 壺			カーン		
59	16	興 壺	□月二十三日				□見法界
60	17	興 壺	二月二十三日				
61	18	興 壺					

出 典	法 名	真 言 etc	所 在	石 材	高	幅	厚
				自然石	130	50	
				玄昌石	120	50	
				玄昌石	90	40	
				玄昌石	70	20	
不明				玄昌石	80	20	
				自然石	70	20	
				玄昌石	80	30	
				玄昌石	破损		
				玄昌石	110	50	
					100	30	
金剛般若波羅密經	道口桿門			玄昌石	100	50	
	尾花桿門			玄昌石	70	20	
				玄昌石	破损		
				自然石	120	50	
				自然石	70	20	
	桿尼昭心		渡板神社前	自然石			
				玄昌石	50	20	

「雄勝町史」にあり、今回の調査で確認できなかった板碑一覧

資料	No	地区名	年代	西暦	種子	年忌	偈
	1	天雄寺	天文十二年癸卯	1543			
	2	昇壇	觀応二四月廿日	1351	サ		
	3	昇壇	□応二年六月				
	4	昇壇	文和五四月□日	1356			
	5	昇壇	永和二年二月	1376	バイ		十方三世佛 一切諸菩薩 八方諸聖□ 皆是阿弥陀
	6	昇壇	觀応元年□□	1350	イ		
	7	昇壇	觀応元年七月□日	1350			
	8	昇壇	九月廿日				
	9	昇壇	正慶三年三月三日	1334			
	10	大浜	建徳三年五月廿日	1372			
	11	立浜	文和□□辰七月十日		カーン		一切有為法 如夢幻泡影 如露亦如電 應作如是觀
	12	立浜	明徳五歳六月	1394	マン	四十九日	
	13	立浜	元七月九日				
	14	大須	延文十一月七日	1360	バ		
	15	大須	永享九年六月二十三日	1437			
	16	水浜	永仁四年申	1296			
	17	渡板	永正八年四月十三日	1511			

編集後記

雄勝町教育委員会 社会教育課長 千葉 博

新しい時代に向け活力ある地域作りの一貫として建造された『サンファンパウティスチ号』の復元にちなみ、後世に何が一つ伝えるものはないかと関係委員各位と協議を重ねた結果、長い歴史の過程のなかで、先人の築いた郷土の文化を探り記録保存することにより、郷土文化の振興にかけた意欲と情熱を再現し、新たな文化の創造に資すべく、雄勝町の文化財『板碑』の発刊の運びとなつた次第です。

編集にあたりましては、石巻市文化財保護委員である佐藤雄一先生に資料の収集、拓本の採取、執筆等に大変なご苦労をおかけしました。真夏の暑い最中、蚊に刺されながら、又冬には冷たい石碑に手がかじかんで感覚を失うような収集作業に、一方ならぬご協力をいただきました事を感謝申し上げますと同時に、心よくご協力下さいました関係地権者の方々に心からお礼申しあげます。

今回発刊する『板碑』は、雄勝町の歴史を探る資料として、町民の方々の郷土史研究の一助となり、又学習教材の資料として活用いただければ幸いと思います。

本町は、昔から度々の津波の来襲により、歴史的価値ある資料を失つており、この度採取された板碑は残された数少ない郷土の遺産と思われます。この度の発刊を機会に町民の方々の文化財に対する理解と関心が高まり、新たな資料が発見され、町の歴史と文化遺産が解明されていく事を願つて、編集にご協力をいただきました多くの方々に重ねて感謝を申し上げ、編集の後記と致します。

平成六年三月

（付記）

ここ数年、雄勝町、女川町、牡鹿町をひとまとめていた「牡鹿半島の板碑」という課題が私の頭のなかで渦巻いていました。拓本を採ることはできたが、どのような形で出版するかということは五里霧中であったのです。そのような時に、雄勝町教育委員会が私の申し出を理解されて、「雄勝町文化財調査報告」の一環として「雄勝町の板碑」を出版されることになったのです。私の夢を実現して下さいました教育委員会の好意ある決断に対して深甚なる謝意を表したいと思います。

さらに、この報告書が予想外の早さで出版することが出来ましたのは、溢れるような情熱で編集作業に取り組んでいただいた社会教育課職員皆さんの仕事の早さと、縦密な企画力によるものです。

特に経験の薄い人には困難ではないかと思われた、トレースから墨入れ作業まで、なんの障害もなくあつという間に仕上げてしまわれた職員の皆さんへのパワーには圧倒されてしましました。あらためて職員の皆さんのご努力とご協力を感謝いたします。

あわせて、土地不案内な私のために、貴重な時間を割いてご案内いただいた地域の方々にも心よりお礼を申し上げます。
この「雄勝町の板碑」が板碑研究の地方からの大きなメッセージになることを信じております。

（佐藤雄一）

雄勝町文化財保護委員会

委員

杉山 源之助

高橋 仁夫

斎藤 政裕

山脇 裕三

小田 道雄

雄勝町の文化財 (-)
雄勝町の板碑

発行日 平成6年3月30日

編集発行 雄勝町教育委員会
〒986-13 宮城県桃生郡雄勝町大字雄勝字伊勢棚84番地の1
TEL 0225(57)3681

印刷 株式会社 鈴木印刷所

